

山崎徹 炉は全室にあるんですか。暖い時には畳が入るんですね。道路側に玄関がありますが通送用の郵便箱はどちら側にありました。店はどこだったんですか。

中川シズ この6畳が店です。

山崎徹 玄関とび出でていませんですか。

中川シズ 出ていません。

山崎徹 この玄関はそっくり移動しているんですね。

中川シズ いや、ちがう。川畠さんが作った。

田中利 こっちの3畳と6畳の縁側は3尺出ているでしょう。それから2階も縁側の下も3尺入っていた。この廊下の方に2階への階段があった。

中川シズ 階段の下に時計がかかっていた。

中川政雄 玄関入いって真直ぐ階段があったような気がする。

田中利 この6畳はほとんど玄関のようななかつこうだったと思う。

中川政雄 川畠さんになってから造作したものだ。

山崎徹 色々ありがとうございました。

中川シズ しっかりしたことがわからなくて。

高松孝行 長い時間ありがとうございました。

中川政雄・シズ どうもありがとうございました。

高松孝行 どうもありがとうございました。

(終)

浦幌町稻穂出土の装身具

後藤秀彦



Map 1 装身具出土位置

ここに紹介する資料は、1962年頃浦幌中学校生徒によって採集されたものである。採集された詳細な年月日、採集者の氏名等は不明であるが、現

在同校教諭松本尚志氏のもとに所蔵されており、1975年筆者が同校を訪れた際松本氏によりその形成時期・用途などについて照会を受けたものである。筆者は、本資料が北海道内にあっては数少ない出土であること、先史時代の装身具を考える上で貴重な資料であると考えここにその概要をとりまとめ報告するものである。

Map 1に示した如く南流する下頃辺川の左岸には通称「吉野台地」と呼ばれる十勝川による河岸段丘が発達し南に向かって緩傾斜する大きな舌状台地となっている。この河岸段丘の先端部付近には下頃辺遺跡（泉1959）・平和遺跡（大場・明石）・吉野遺跡（大場・後藤1973）などの縄文早



PL. 1 浦幌町字稻穂出土の装身具 (×1.5)

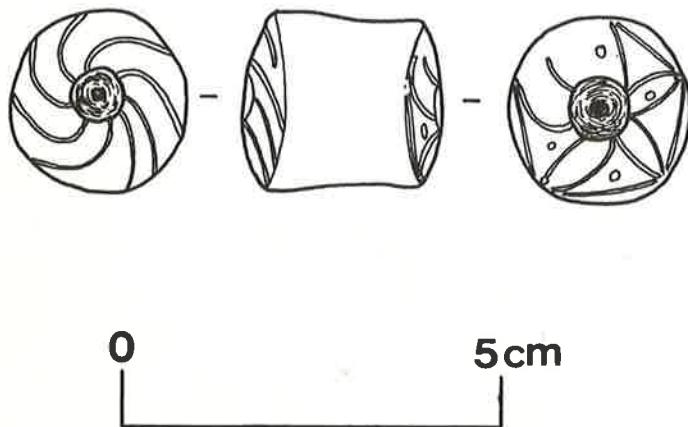


Fig. 1 浦幌町字稻穂出土の装身具

期の遺跡が軒を並べる地域である。この段丘の北部、即ち下頃辺川の中流附近——浦幌町稻穂地区——の左岸段丘上は緩傾斜の小規模な舌状台地が分布する箇所である。

PL. 1 および Fig. 1 に示した資料は胴中央部のやや細まった筒状を呈し長さ2.7cm、直径2.4cm、くびれ部分の直径2.2cmを計測する。両側の中央には直径0.8cmのくぼみが施されている。文様は各サイドで異り、一方ではくぼみを中心に沈線をもって8条のトモエ状の曲線を施し、一方ではくぼみを中心にして花弁状の文様を配し更に円形の刺突文が花弁上・花弁と花弁との間あるいは花弁の先端部に施している。胴部には文様はないが堅く研磨したような鈍い光沢をもっている。

以上のような内容をもつ本資料は「耳栓」と考えられるが、北海道内にあってはその出土の報告にあまり接することはできない。

しかし、管見の範囲では由仁町東三川遺跡で突瘤文をもつ東三川I式土器に伴って「臼状耳飾」が出土しており、形態にやや差異が認められるがほぼ同時期のものと考えて良いものと思う。東三川I式は、報告者によって大洞B式に比定され、縄文後期末に堂林式、晩期初頭に東三川I式という編年が試みられている。(野村1969) 稲穂出土の耳栓には土器がともに検出されていないので定かではないが縄文後期末～晩期初頭のものと言えそうである。

引 用 文 献

- 泉 靖一 (1959) シタコロベで土器を発見した話
釧路博物館新聞93
- 大場利夫・明石博志 (1971) 浦幌町平和遺跡
——・後藤秀彦 (1973) 浦幌町吉野遺跡、日
本考古学年報24
- 野村 崇 (1969) 由仁町東三川遺跡、北海道由仁
町の先史時代

1976年1月1日	印 刷
1976年1月1日	發 行
編 集 後 藤 秀 彦	
發行責任者 家 村 克 行	
發 行 所 浦幌町郷土博物館 (089-56)	
北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地	
印 刷 所 大同出版紙業株式会社 (080)	
北海道帯広市西7条南6丁目	